第五章　流氷群塊

1

白岩由吉は、足枷を外されたが、両手にはまだ特製の重い鉄具が嵌められていた。この網走刑務所に送られてきて七ヵ月が経っていた。

凄まじい地吹雪の日が続いた。

裏山の白樺林の若木が、ばきっと音を立てて裂けた。

獄舎につながれていると、引き裂かれるものの音は悲鳴に聞えた。

地吹雪がごおーっと鳴る。地表を叩くというよりは、削って行く。びしっびしっと頬を打たれているような音も混じった。

小さな場所に押し込められ、荒れ狂う冬の最中に身をおいていると、すべての音が痛かった。

すでに、手錠の嵌められた両手首には感覚がない。指を動かさずにおくと、凍傷にでもなるのか、指先 がすぐ紫色に変った。血を通わせるために、指先だ けで空を何度も掘んだ。今日の地吹雪の荒れ様は、これまでにない激しさだった。

彼には恐怖感さえあった。

北風が鋭く切り込む日は流氷群が遠くの

海で軌（きし）りの声を発した。
流氷群はどんどん陸の方角に押されて、見る間に隆起し、がしんとぶつかり合う。まるで地震と同じように地が震えた。どどどどー、ぶるるんっと地鳴りがした。木造の網走刑務所全体が、地表ごと揺すぶられていた。

がーんっ
ぎきぎぎいーっ
ばしんっ、ばりばりっ

白一面の地表は刻一刻にその様相を変えて行くのだった。一つとして同じ音はない。白岩由吉は、一匹の巨大な怪獣の姿を頭に描いた。眼に見えていたわけではなかった。この世のあらゆる悪に対して立ち向っているそれは白い巨人のようにも思えた。
ちっぽけな人間どもを踏み潰す、荒々しい音でもある。巨きな鋭い爪が、がきっと、氷塊を叩き割った。この北の地にへばりつくようにして生きている人間たちの息の根を止めようとでもするようにー。
ずずずーんっとまた地響きがした。
（おらは、生きたまま、咆哮（ほうこう）している巨大な生き物だべ。いや、吉峯の爺ちゃの魂だっておらの肉体にもはやのり移ってるだ。いやいや、この網走刑務所で怨みをのみながら死んで行った者全部だ。みんなの魂がおらには憑いている）
白岩由吉は同じことばを何度も呟いてきた

。挫けそうになる自分の心に、鞭打ったのだった。
「生きながらの地獄なら、もう何度もくぐってきただ。へっ、こんなこたぁ、糞くらえだべ」
彼は立上り、舎房の中をぐるぐると歩き回った。寒さもそうだったが、じっとしていては自慢の脚力が鈍ると思ったのだ。絶対に、どうしてもこの氷海に閉じ込められた網走刑務所を脱獄する気だった。
いつだったか、事京・小菅刑務所にいた時に、彼は五寸釘寅吉（ごすんくぎとらきち）という脱獄囚の話を聞いた。
この男の脱獄記録は七回で、いまのところ日本一の脱獄囚だった。その時、すでに白岩由吉は五回の脱獄歴があった。
秋田刑務所を破獄する前のことである。土工人夫の時に、若さにまかせて、ヒコーキしたぐらいだから、この五寸釘寅吉の六回の脱獄歴に彼は関心を持った。
刑務所の中では、五寸釘寅吉は伝説中の人物で、英雄扱いされていた。青森刑務所を錠前破り（つめおとし）で、脱獄したことは知られていたが、白岩由吉はまだ、脱獄の名人としての名はそれほどでもなかった。
五寸釘寅吉は人を何人も殺した兇悪犯だったが、脱獄歴七回の凄さのほうで名を知られていた。子供の頃から気が短くて喧嘩早く、また敏捷な身のこなしだったと言われる。
自分を可愛がってくれた叔父が博突好きで、いかさま博変をやって見破られヤキを

入れられて、それが元で死んだ。
寅吉は叔父の復讐を誓い、抜身の日本刀を下げて単身賭場に乗り込み、博徒の親分やその手下共に斬りつけ傷を負わせた。
一時代前の村芝居を見るような話だった。これは江戸末期の頃の話で、寅吉少年十四歳の時だった。
牢獄につながれた寅吉は、死んだとばかり思っていた博変打ちの親分が命をとりとめたと聞いて無念の思いがおさまらず、同囚の手を借りて牢を抜けた。
仇敵を探し求めて賭場に出入りしているうちに寅吉 にはすっかり渡世人（とせいにん）の垢が身についてしまった。
賭場に手入れがあり、捕まってまた三重の集治監に収監された。
そこをまた脱獄し、また縄にかかって今度は秋田集治監に移された。
ここは五ヵ月後に脱獄した。
自分の故郷の三重を目指す途中、静岡の賭場で場銭をたっぷり頂戴したのはいいが、叔父ゆずりのイカサマだったので、それがばれて乱闘騒ぎ、巡回中の羅卒（巡査）に発見され逃げる途中に五寸釘の刺さった板を踏みつけた。釘を引き抜く暇もないのでそのまま三里（十二キロ）の道を走り逃げたところから、のちに五寸釘寅吉の名が付いた。
東京・小菅監獄に移されたのち、北海道の樺戸（かばと）集治監に移送された。だが、ここも脱獄する。

その脱獄方法の一つを紹介すると、仲間がいかに彼の脱獄を助けたかということがよくわかる。高い塀を越えるために、かねてよりしめし合わせていた仲間がさっと寅吉を取り囲んだ。

木綿の赤い獄衣を寅吉が脱ぎ、地面に広げておくと、囚人たちがそれぞれ、その赤い獄衣の上に小便を垂れ流した。

小便でぐしょ濡れになった獄衣を仲間の一人が塀の外に一部が垂れるように工夫して、思い切り塀に叩きつけた。

塀に張りついた獄衣の渡し板の上を、身軽な寅吉は駆け上り、そのまま、塀の上に立ち、あっという間に塀の外に消えたと話にはある。

白岩由吉の脚力と同じように、五寸釘の寅吉も一日に山野を四十里（一六〇キロ）も駆け抜けたという。

各地を逃げ歩き、豪商の家や、鰊御殿にすむお大尽（だいじん）の土蔵倉に入り、貧しい人々の家に、夜のうちに金などを投げ入れたので義賊としてねずみ　小僧次郎吉以来の人気を得た。

ただ、半年後、釧路の鉄火場　賭場　に現われたところを捕まって、再び、樺戸集治監に復監させられる。

警戒体制が厳重になり、構外作業をする時に装着される玉嵌（たまはめ）の四キロの鉄丸をふつう一個のところを二個つけられた。脱獄を囚徒が助けてくれるのは、この男が侠容肌な上に、前科を何度も重ねて

いたので、いわゆる江戸時代にいたと言われる牢名主のような地位にいたからであった。

その年の冬、冬には脱獄囚は逃げないという定説を破って、五寸釘寅吉は仲間の協力を得てまたまた脱獄する。

大豪雪の年だったので、雪掻き作業に外に出された。屋根の雪掻き作業だから、足の鉄丸はこの時は外される。その機会をじっと待っていたのである。

雪おろしされた雪が、塀の高さにまで積み上げられた時、行動を開始した。

あっという間に身を翻し、雪の上に身を投げると、塀にとびつき、外の雪の中に身を投げた。落下地点にはすでに仲間の揃えた雪中逃亡用のカンジキ、食糧、それに雪と同じ色の白のカモフラージュ用の布切れなどが用意されてあった。

この時も結局、三ヵ月後に函館で捕まり、再び樺戸集治監にもどされた。

やることは同じで、専門の看守が彼には四人もついた。

四、六時中の監視である。

三度目の脱獄を助けてくれたのはこれまた仲間の鍵作りの名人だった。

雑役夫の手を経て一個の合鍵がめしの中に入れられて持ち込まれた。

金属製のものではなかった。粘土で鍵の型をとり、丈夫な和紙で観世縫（かんぜよ）りを作り、それに飯粒を練り上げて塗りつけ、強力な漆喰（しっくい）で縫り固めると

いう手の込んだ鍵だった。
そういうものを作り上げることの出来る職人肌の男がいたのである。
翌朝、今度は舎房の裏口を開けるための合鍵がやはり、めしの中に隠されていた。真夜中、看守の隙を見て、やすやすとニカ所の鍵を開け、彼は逃走に成功した。
同じ棒戸集治監から三度も脱獄したことになる。
今度は、北の果てから、南の九州までの逃避行となる。留萌（るもい）港から、北陸ルートの汽船に水夫（かこ）として乗り、富山に上陸、大阪の人込みに紛れてしまった。
のち、福岡県で逮捕される。
すでにこの時、五寸釘寅吉は四十歳を越えていた。北海道の空知（そらち）集治監に送られたが、ここも間もなく脱獄、ただ一週間ほどで捕まった。
次は釧路集治監で、北海道中の集治監を彼はひとわたり巡ったことになる。
釧路の標茶（しべちや）集治監が、網走監獄に移される時に、五寸釘寅吉も網走に来た。
だが、この日本中を沸かせた脱獄魔五寸釘寅吉も、寄る年波のせいもあったが、網走刑務所を脱獄することはなかった。
網走刑務所の赤い煉瓦塀を越えたものは一人もいないーそれは事実であった。そのことは、白岩由吉も知っていた。いや、秋田刑務所の鎮静房を破獄したことで六回

の記録を作った。
七回目 ―その機会が与えられていたが、あまりにも苛酷な試練であった。
網走刑務所の赤煉瓦塀が完成したのは大正十三年十月とされている。
大正十三年の九月三日に五寸釘寅吉はこの年から網走刑務所と名称の変った刑務所を仮出所した。
赤い煉瓦塀はすでにこの時、彼には何の意味も持ってはいなかった。
だが、煉瓦塀が完成してから二十年近く、まだ一人として網走刑務所の高い塀を越えたものはないのであった。

2

白岩由吉が機嫌がよくなるのは、週に一度の入浴日だけだった。
なにしろ朝から看守が七人掛かりで、彼の世話をすることになる。
足枷を嵌められていた時はもっと大変だった。みんなに抱えられて舎房の外に出、浴場の控室の板の間に転されて、足枷・手枷の順に、かしめ部分を外された。
手枷だけになってからは時間は短縮されたが、それでも小一時間はかかった。刑務所での入浴は収容者数、施設の都合などにもよるがおよそ一人三分間である。
だが、白岩由吉だけは特別扱いだった。釈前（しゃくぜん）入浴というのがあって、釈放前日の受刑者だけはたった一人で、

更湯に、ゆっくりと身を浸すことが許されていた。入浴のたびに、彼はこの釈前入浴のように、広い浴槽内でのんびりと、体が温たまるまで入浴を楽しんだ。

自然と機嫌がよくなる道理であった。

時には、自慢の津軽よされ節も出た。

入浴時間も、鼻唄を歌うことも、一人で入ることも絶対に刑務所ではあり得ないことだった。

いい気な王様ぶりに、若い看守たちは、

「あの野郎！なに様の気でいやがる」

、と反発したが、白岩を刺激しないよう命ぜられていたから白岩の反則行為は大目に見た。だが、白岩は、鼻唄も歌わなくなったし、「早く出ろ」と言われれば、素直に従うようにもなった。

余程、舎房内での特製鉄具の使用が応えているとみえた。反抗的だったのに、鏨（たがね）で止め金の頭をはつって外し、また、軟鉄を穴に打ち込む時でも、彼は文句を言わないようになった。

「ご苦労さんなことだの」

彼は看守相手に慰めのことばまで用意した。白岩由吉は、彼なりにちゃんと計算をしていた。楯付いていた頃は、看守も人間だから、腹いせに、彼が痛がろうが、文句を言おうが、力まかせにハンマーを揮った。

穏やかに接すると、余計な力は加わらない。それだけ、止め金部分の打ち込み作業は甘くなる道理であった。

力の強い者と弱い者のちがいもある。そ

れから看守の性格もあった。
感情とは関係なく、職務にばかり忠実で、がんがん打ちつける者もいた。
足枷を外されてまだニヵ月たらず、この網走刑務所に移送されてもう七ヵ月が経過していた。一人一人の看守の癖や性格などをメモ帳に記しておきたいほどに正確に、彼はこの七ヵ月の問に、各人の仕事ぶりを観察していた。
小塚看守は、この七ヵ月の問に、十回は彼を殴り付けた。反則行為のあら探しをした。小塚看守だけには彼は口をきかなかった。反則のあら探しに、脅しの行為、彼は、小塚看守にだけは憎悪心を募らせていた。そんな彼に、小塚看守はよく憎まれ口をきいた。
「人間の姿じゃないぞ。どうせお前は地獄行きだが、飢餓地獄界に堕ちるとな、食糞飢鬼というのがいて な、腹が減るから、だれかが糞をたれるのをそのそ ばでずっと待っているんだとよ。どうだ、二十四号はくさくてかなわん、白岩、お前、自分の糞も一緒 に食らったらどうだア。死人の肉や、焼いた灰まで 食う飢鬼もいるそうだぞ」
二十四号舎房には、白岩の垂れ流した糞便の匂いが染みついていたのだった。
ある日、自房内で足をからませ、白岩は前につんのめった。
舎房の板の上に倒れ込んだ。
いやというほど、鉄具の部分を板に打ち

つけた。あまりの痛さに、彼はうーんと呻いてしまった。
他の房は畳敷きなのだが、二週間ほど前、入浴している間に、すっかり板敷きの間にされてしまった。
畳に染みついた糞便の匂いを取り除くためと、畳でもはがされて、床でも壊され、そこから逃げられてはという、二重の配慮が働いていた。
畳なら、打ちつけても唸（うな）るほどのことはなかったのに、硬い板材だったから、手首が痺れるほどに響いたのである。その物音に、隣房の見張番、野沢看守が先ず気付いた。二十三号舎房の外の視察窓横の小板がはね出た。これは房の中から操作できる。看守に用事がある時に、受刑者側から、告知する装置の一つだった。
中央見張所にいた小塚看守も、物音を聞きつけて素っ飛んできた。
板の間にうずくまったまま、まだ、白岩はうんうんと唸っていた。
「馬鹿が、床を壊そうたってそうはいかんぞ。あいにくと床板はな、槐（えんじゅ）材だ。いちばん固い。今度ぶつけたら手首の骨が折れるぞ」
小塚看守が毒付いたあとに、野沢看守が二十四号舎房に入ってきた。
「お隣りさん同士だ。おい、怪我はなかったか」
食い込んだ鉄具のせいで、手首の回りに傷ができていた。ヨードチンキを塗られた。

「倒れてもそれじゃ、前に手はつけんからな。お前、少し足腰が弱っているのか。それとも脚気にでもやられたのか」
野沢看守が言った。
このとき、小塚看守はもう房を出ていた。
「担当さん、おらいつまで、こした恰好でいねば駄（まい）ねんだがあ。無期懲役だはあんで死ぬまでこうしてちけろってごどだんだがあ。おらも四十さ近えんだし、思い残すごとあねんだはで、小塚の鬼が当直の夜にでも、舌噛み切って死んでやるがと思ってるんだ。それしかおらに残された道はねえもんな」
白岩は愚痴まで口にした。
野沢看守には白岩が弱気になっているように見えた。
「止せ止せ、おまえな。人間なかなか死なんもんでな、舌噛み切る位ではなかなか死なんのよな。それで失敗して、舌先なくなってみろ、ろくろく喋れんようになるぞ」
と、野沢は白岩をなだめた。
「へへ、どうせ嘘っこき人生だア、おら、閻魔（えんま）様の前でどうせ舌抜かれるだがらな、同じことだべ」
「ま、止したほうがいい、いまは戦争中だから人手不足だ。ここだって通常の三分の二の人間でやっている。戦争に勝ったら、その時は、人手も増えるから、その手錠も外してくれるだろうさ。ここではな、所長に直接お前のことが言えるのはこのわたしだけだ。我慢してりゃ、所長もふつうの状態には戻して下さる。ともかく、おとなしくしていることだ」

野沢はたしかに人も好かったが、職務に忠実な男でもあった　ともかく、逃げられないためのあの手、この手、多少の親切ごかしの態度がなかったわけではない。

3

妙な噂が立つようになっていた。

冬の暗さに加えて、流氷鳴りの怖ろしい音、地吹雪の地を揺るがす気配、だれでもこの時期は、暗い気持になるものである。

まして舎房の並ぶ五つの通路は、昼間でも暗く、陰惨な感じであった。

特に四舎房の独居棟は、いつも静まり返っているだけに無気味であった。

中央見張所に立つ看守たちの間で、白岩由吉の生霊を見たという者が何人も現われた。催眠術、気合術、それに忍術も使う一前から白岩由吉について回っていた話であったが、網走刑務所ではいつの間にか、これが真実話となって行った。

保安課長からも、白岩由吉の眼は直視するな、挑発にのらぬようにしろ、寸分の隙もみせるなと看守たちは言われていた。

眼を直視するなというのは、催眠術にかけられるおそれがあると、本当に、刑務所の幹部たちが考えていたからである。

中央見張所のあるすぐ近くには、ルンペンストーブがおかれている。

少しは暖かい。

真夜中になると、つい、居眠りをして

しまう看守もいないではなかった。
ある夜のこと。
A看守は、ほんとうに、暗い通路を、手錠もなしにすたすたと歩いて来る白岩由吉の姿を見た。夢であったが……。
その時は気になって、二十四号舎房まで足を運び、視察孔をそっと開けて舎房内を覗いた。仰天した。
白岩の怒りに充ちたまん丸い眼が二つ、かっと見 開かれていた。いわゆる出合い頭というやつであった。思わず、看守は「あっ」と叫んでしまった。
「いまなっ、吉峯の爺ちゃが、この房から帰ったところだべさ。おら、見送ってやっだところだべ」
「…」
あわてて、A看守は眼を外らした。
白岩由吉の眼を直視してはならないと上司からは言われていたからだった。
視察孔の前から逃げ出した。
中央見張所に戻ってからまだ若いA看守は胸をどきどきさせていた。
催眠術に気合術、それに忍術を使うーすんでのところに、自分も術に掛けられるところだったと思うと、身が疎んだ。
同じ四舎房の一室で吐血し、死んだ吉峯勇蔵の死霊が、この四舎房の暗闇の中に棲みついているーそんな話もここでは横行していた。この刑務所に伝わるいくつかの怪談話も、同時に、頭に浮かび、A看守の背筋は凍った。

それに、異様な光を帯びた白岩由吉の二つの眼、まさに眼光に射たれていた。
白岩由吉は、話術にも長けているところがあった。人心操作の術を心得ていたともいえる。
野沢看守に語った話も看守たちの間では知れていた。
「おらは山の中で、育ったもんで気合術ちゅうもん ががけられるんだ。飛んでる鳥でもな、おらが気合 いかげれば、ぱたっど、空から落ぢてくるんだどう。嘘でねじゃ。おらごと運動に外さ出してくれだはん だら、はア、一発で落どしてみせでやらアね」
まさかと思っていたら、その時、一匹の蜘蛛が、壁際を伝って来た。
「うおっ！」気合いを入れたら、ぴたっと動かなくなった。当り前のことだったが、野沢看守は感じ入った。
「ほれ、動いてみろじゃ」
と、白岩が言ったらまた蜘蛛はごそごそと動き出した。
彼は気合いを掛ける時に、手枷の鉄具をごつんと床にぶつけていた。そのことには野沢看守は気が付かなかった。「うおっ」という声に気をとられた。
術と言えば術ではあった。
野沢看守が、催眠術を掛けられてはと眼を外らして話すると、
「担当さんよ。人間はな、眼ど眼ど見合って話しばしねえと、相手のこころば読めねえってすべさ。担当さん、おらの顔見ねで

話す癖あるむ、な」
とやられた。彼自身も、いろんな術がかけられるという話はあちこちの刑務所で吹聴（ふいちょう）してきた。
脱獄した時の調書をとられた時にも、催眠術をかけたとか、忍術の速歩の術を使ったとかいい加減なことを述べ立てた。
まわりまわって、白岩由吉には超人としての伝説ができ上っていたのであった。

ごおごおー、ごおっ、ぱしんっ…。
ますます、オホーツク海に張りついた流氷群は、苦しそうに身をもがき始めた。
二十四号舎房の白岩由吉は、このところ少しずつ精気を失なっていた。手首の締め付けがきついので、肩先にいつも鈍痛があった。不自然な体の状態だから腰骨も痛む。寒さのために、指先が紫色にもなっていた。
だが、気力を充実させないと、このまま体力が弱って獄死することになると彼は思った。それで、就寝時間中でも、固い板床に坐り、精神集中の行をやった。
居合い抜きの香具師（やし）が、術中で同じようなことをやってみせたのを見た。
仏様の結跏趺坐（けっかふざ）のポーズで、もも右の足を左股に、そして左の足を右股の上にあげ、足の裏をあお向けにして組む。
念は眉間に集めよと、その時、袴（はかま）姿の香具師の男は言った。
そんな夜中の奇行を、視察孔からたしかめ

た看守たちは、白岩由吉に鬼気迫るものを感じた。あまり、みんな、二十四号舎房に近寄らなくなった。

幽霊話にはますます、尾鰭（おびれ）がつき、夜間勤務の看守たちは、勤務を嫌った。

脱獄魔とは言え、この刑務所で、白岩由吉という男が異常な状態で監禁されているのは事実であった。看守の中にも“これは少しやり過ぎだ”と思う者もいた。

白岩由吉の怨念のほどが二十四号舎房からは四、六時中漂っているのようだった。陰惨なだけでなく、汚物の匂いと体臭の入りまじったなんとも表現の仕様のない臭気までが、嗅ぎとれた。

二人目、三人目の看守も、白岩由吉の術に嵌ったのか、吉峯老人が、ひょこひょこと歩いているのを見、そして二十四号舎房に入って行くのを見た。

「吉峯の爺ちゃ、おらごと助げでけろ。そしたば爺ちゃの骨ごとまちがえねぐおらが竜飛崎（たっぴ　ざき）の爺ちゃのふるさと、送りとどけてやるはでな」

苦しい時の神頼みであったが、結跏趺坐を組んだ彼はしきりに、爺ちゃの名を呼んだ。

タコ部屋では、仕事をして寝るだけの時間しかなかったから、吉峯勇蔵とそれほどの親交を持ったわけではなかったが、一つ一つ、彼はその時の話の内容を思い出して行った。

『冬さなれば、海が荒れで、波がぶっちぎれで村のさ中さ降るんだ。雪っこまじゃって寒（さ）び日だば、雪道が氷みてえになってしまうべ。浜さ三十分もいればア、氷のはア、人柱が立つべえよ。冬の海は空もまっくろになっで、ほんとおっがねえ』

『でもはあ、春さなれば山つつじがな、赤色（あげいろ）の花こごとば咲がせで、火みてだにもえ上るえんたに、見えだもんだって。崖場にはナズナの白い花がくっづでいでな』

『マツカ石のあたりにはニッコウキスゲのほれえ、黄色い花が夏になると咲いでいたなア。夜になればイカ釣り舟が出でな、海さ、蛍火がゆーらゆーら、ゆれていたもんだべえ』

由吉は三歳の時に三厩（みんまや）の漁村を離れていたから吉峯勇蔵の語ってくれた津軽半島先端部あたりの漁村の四季のつれづれはほとんど記憶がない。

だが、爺ちゃの昔語りの話を一つずつ、つないで行くうちに、おぼろげながら自分自身の幼児体験が甦ってきた。

やはり、北の海特有の波の荒らさと、暗い思いしかない。暗い海が怖くて、昼間なのにわが家に走って帰ったことがあった。海から寄せて来る波が子供の小さな体をひと呑みにしてしまいそうに思われたのだった。

吉峯の爺ちゃが自分の父親のように思えた。いつ の頃からか、彼は「お父ちゃ、おら

を助けてぐれえ」と祈るようになっていた。
しばれる寒さというが、そんな生易しいものではなかった。零下十度近くにも室温は夜明け前になると下る。鼻水を垂らしたら、たちどころに氷の結晶になる。吐く息さえ凍るかと思われた。
いや、息を吐けば体温が奪われると、小さく鼻先で息を吸ったり吐いたりした。
吐いた息が壁に当ると水蒸気が張りつき白い結晶になる。
みんな、小さな星型の砂糖菓子になぞ。らえて〝コンペイト〟〟と言っていた。
小便も差し控えた。やはり体温が急に奪われてしまいそうに思えたのだった。
何度か、舎房内で、彼は吉峯勇蔵と話合っている気になったことがある。一種の幻覚症状なのかも知れなかった。雪の中で行き倒れになった者は、とても気持よくなり、美しい夢を見ながら死ぬという。
〝いま死んだらみんなの思う壺だべ〟
はっとして眼が覚める。雪の中で行き倒れになった人間が、われに返り、このまま眠っては死ぬと自分に言い聞かせるのに似ていた。美しい夢は、死神の夢魔が操る束の間の夢にしか過ぎないのだ。
「ああ、なんぼが、寒いべなア」
束の間の夢から覚めると、彼は、雪の吹きっさらしの中にある北山墓地のことを思った。土饅頭が作られたその下の冷めたい土の中に吉峯勇蔵の死体は凍てついたまま横たえられているにちがいなかった。

「お父ちゃ、まんだ、おらの舎房の中のほうがぬくいぞ」
そう、呼び掛けてもみる。
ほんとうに、刑務所の裏山にある北山墓地から、吉峯勇蔵の亡霊はこの雪の中をとぼとぼと歩いて来るのかも知れなかった。
もう、自由の身なのだった。
赤い巨塀も、鉄門も、いくつもの錠前も、姿かたちのない亡霊にはなんの障害にもならない。暗闇に紛れて、塀だって、鉄枠だってすっと擦り抜ければいいー
この思いは、白岩由吉の頭の中に描かれたものだった。自由な身になることの憧れ、手枷の冷たさと、重たさから解き放たれたいと願う心がありもしない話を作り出したのだ。
だが、吉峯勇蔵の亡霊が、暗い通路を音もなく歩いて来て、ぴたっと二十四号舎房の前で止まり、すっと舎房の中に入って行くのが何人もの看守には見えた。
決まって、その時は急にぞくぞくっとし、背中が凍りつくようになる。
みんな金縛りに会っていて、眼だけが、亡霊らしきものの姿に吸い付けられる。
あの、鬼の小塚も不動金縛りになったうちの一人だった。噂話をたしかめるために気丈な小塚は気を張って長い四舎房の通路の先を凝視しいた。
ぎぎぎぎいーっ、ぎっその音にびくりと身を震わせた。山門を開ける時のような音である。それは流氷群の身を擦り合う軌みの音にしか過ぎなかったが、すでに、恐怖感が先に

立ち、小塚は身が疎んでしまった。
聞えるはずはないのに、中央見張所からは一番奥になる吉峯勇蔵の収監されていた七十八号房のあたりから「ごほーん、ごほーんっ…」という肺病患者特有の空咳の音さえ聞えてきた。
なんともおぞましい死者の声だった。
やはり、小塚も痩せさらばえた老人の亡霊を見た。ふと見失った。
たしかにそれは二十四号舎房のあたりだった。同僚に交代時間の時に起された。不覚にも彼は眠りの底に落ちていたのだった。
「小塚さんも…」
真っ蒼な顔色の小塚の顔を見れば一眼でわかる。同僚の看守はそれ以上は言わなかった。口をつぐんだ。
ほんとうに亡霊が夜毎に、白岩由吉を訪れるのか、白岩由吉の遠隔操作による催眠術をみんながかけられているのか、看守たちにはどちらともわからなかった。
ただ、亡霊を見た者はきまって、そのあと深い眠りに落ちていた。

4

白岩由吉は孤独な戦いに一人挑んでいたが、舎房の中に閉じ込められていても、同じ受刑者の仲間からは励ましのことばを受けていた。槐（えんじゅ）材の格子を磨くためにやって来る雑役夫、食糧を差し入れる役の雑役夫たちと、看守の眼を盗んでではあったが、ことばを交わし合うことがあった。

『この冬越せば大丈夫だ。それまで頑張れ』
『要るものがあれば言ってくれ。用立てしてやるでな』
『みんなが絶対に逃げてやれと言ってるぞ』
無言の励ましもあった。
めしの盛りが他の者よりよかった。
味噌汁の具も、菜の皿も彼を勇気付けるために仲間たちは余分の量をくれた。
針金や、鋸の代用になるものを差入れしてもらおうと思えばできた。が、すでに、彼は隠し筒の中に針金も忍ばせていた。
だが、針金は今は役に立たない。
ともかく、手枷のかしめの棒を取り外さない限り、逃げようがないのであった。
ある日、彼は手枷の嵌められている手首の部分を見て唖然（あぜん）とした。
鉄具と擦れたところが黒ずんだ輪になっていた。「こいだば、凍傷の前兆だ」と思わず呟やいた。
締めつけられている部分は、欝血の状態にあるから血の循環が悪い。隣房に相変らず張り付いている野沢看守に声を掛けた。
二十四号舎房に入ってきた野沢看守に、
「この手枷だば、おらの手首腐れで落ぢてしまうじゃ。どうが、もう引き千切ったりしねはで、ふつうだだ、手錠さ、変えでけねべがア。担当さん、頼んでみでけすながア」
と、頼み込んだ。
「うーむ、まず無理だろうな。お前を収監するために特別の舎房でも作らないときいてはもらえんだろう。まあ、一度、伺いは

立ててみるがな」
丁度その日は入浴日だった。
一度外された時に、湯漕の中でよく暖め、揉んだら、だいぶ黒ずんだ輪がとれ、その部分の痒みもなくなった。
ところが、入浴が終り自房に帰ってから、一つの僥倖（ぎょうこう）に彼は恵まれた。自房に入ったとたんに、ちょっと躓き、風呂の道具を下に落した。
まだ、ぬらぬらした石鹸を踏みつけ、横倒しだったが、変な恰好で板床に体をぶつけてしまった。
やはりその時、止め金部分のかしめを終ったばかりの手枷の鉄具を板床に打ちつけてしまった。肩先にびりっと来た。痺れがあった。同じことを二度やった。
ついて来た野沢看守がまた「畳なら痛くはないのにな」と一つのヒントになることばを発した。
実は、昨夜、彼は、脱獄を決行するためには絶対に、この鉄具の止め金を外すしかないと結論を下した。
あれこれとこれまでは考え過ぎた。
鉄具を外される入浴日も逃げるチャンスのある日だった。
だが、実際は八人もの看守が前後左右を固めるので実行は不可能であった。隠し筒に、針金はあるのだから、二十四号舎房の錠は開ける自信はある。
具合いのいいことに、視察孔の下に四本の鉄枠があり、その横の細長い覗き窓の鉄

枠は手が外に出せるほどの隙間があった。
鉄枠窓の下、五、六十センチの場所に閂式（かんぬきしき）の錠があった。
中からは操作できないが、外から二重ロック式の閂形状の把手（とって）を回すことで扉は完全に閉まる。
鍵穴式のものではなかった。
だが、この行為を果すには、手枷がある以上、絶対に不可能であった。
要するに、手枷を外し、両手の自由をとりもどすことしかない。
このまま凍傷を悪化させれば鉄具は外されるとも考えた。
が、彼は北の果ての土工作業の現場で、手首が腐ってぐちゅぐちゅになり、手を失なった土工たちを何人も見た。
組織が壊死（えし）の症状を示すのだから、見た目よりもずっと症状が悪化していることがあるのである。
絶対に手枷を外すこと。
そう固く心に期した。
この日、鉄具のかしめ部分のハンマー打ちを引き受けたのは野沢看守だった。一打毎に彼が顔をしかめたものだから、いつもより短時間で野沢は作業を了えた。もちろん、止め金部分はかしめられ、平らになっていたが、いつもより、手首の締め付けはきつくなかった。何度も外されたり、装着されたりして来たから、締め付けの具合はよくわかる。二つ合わせの鉄の貝殻と思えばよかった。

止めを 緩くすれば、貝殻の口は少し外に開く。もっとも、 なに一つ、この頑丈な鉄具を外す自信などなかった。
締め付けが緩いのは一つのチャンスだと考えただけのことだった。
一つの僥倖とは、鉄具を槐（えんじゅ）材の堅い床板にぶつけたことだった。
昨夜も、夜中に吉峯のお父ちゃにいい智恵を授けてくれと頼んだ。
ふっと彼の頭にひらめいたのは、槐材の床板の堅さだった。特別に彼のために、手や、鉄具をぶつけても、かんたんには損われない床板を刑務所側は用意した。
これこそ、一つの僥倖ではないか。
二度までも、鉄具をぶつけたのもこれは偶然ではない。吉峯のお父ちゃが頼みを聞いてくれたと彼は信じた。
野沢看守に、彼なりに計算した難問をぶつけてみた。黒い手首の輸は血の循環がよくなったのか、少し生色をとり戻した。
週二回の入浴許可を貰ってくれと頼み込んだ。一回でも、看守たちが、取り扱いに手をやいているのを彼はよく知っていた。許可になるはずがなかった。
直ぐに上司に伺いを立てたが、野沢看守は許可にならなかったと告げに来た。
別にがっかりしなかった。
これは心理作戦の一つだった。
隣りの房に野沢看守が見張り番に入ってしばらくしてから、彼は槐材の床板に、ごつんとかしめられた止め金部分をぶつけて

みた。入口の沓（くつ）脱ぎ場から十センチほど床板部分は高くなっている。
その角にぶつけた。三秒と経たないうちに中央見張所から看守が飛んで来た。
「おい、止めろ、いまなにをやった」
視察孔から若い看守が睨みつけていた
「すみません、さっき転んでせえ、肩のあだりが痺れで、わんつ少しの間がでいいはで、これごと外してけねべがア」
「馬鹿言え、さっぎ大仕事したところだ」
「少しずつ、打ちつけでいるどオ、痺れが少しはとれるもんで、それでえ」
「駄目だ、それはならんぞ」
「これ嵌められで、もう九ヵ月にもなるんだア、手首だってえ、腫れ上っちまづて、なあ、こしたに辛えだばもうおら死にてエ。肩のどご痺れがくれば、気がおがしけになるじゃ」
「それも自業自得というものだろ」
「すみませんでした。おらが悪うございました」
この時は素直に彼は謝まった。
腹の中は煮えくり返っていた。“畜生奴！いまに見ていろ！”と一人呟やいた。
「わかればいい、ちゃんと正座していろ」
独居房内ではふつう正座しているのが決まりだった。午後三時から二時聞と、食事時、午後七時から就寝中だけは居坐の姿勢は自由になる。
だが、一時間もたつと、また、彼はごつんごつんと鉄具を床板の角にぶつけた。明

らかに反則行為だった。　　‥
また看守が来た。
担当の野沢看守も舎房内まで様子を見に来たが、あまりに、彼が辛そうな顔をするので大目に見ることにした。
しめた！と思った。
だが、かしめ部分は軟鉄とは言え、鉄にはちがいないのだから、いくら打ちつけてもなんの変化も見られなかった。打ち壊す、その気持に支えられていたが、打ちつけるたびに骨に響いた。痛かった。
が、この方法しかない、ここで挫けたらおれの敗けだ。
今年の冬は何とか持っても、来年の冬はもう越せないだろうと考えた。
狭い居房内にいるのだから脚力だって衰える。いや、来年の冬は二十四号舎房で凍死するだろう、と考えた。
死ぬ気でやれば…歯を喰いしばって彼は耐えた。「死ぬのはかんたんや。命がなくなればええ。そやけど生きるのはなんぎなことや…」蟹工船に乗っていた時に羅本という関西弁の男が言った。
彼はまたそのことばを思い出した。一週間目、また入浴日がやって来る。
ここでまた、かしめ打ちをはじめからやられたら折角の努力も水の泡、一からやり直さなければならない。
到底、一週間の時日で壊れるような鉄具ではなかった。
が、鉄具をぶつける行為は反則行為だか

ら、入浴日の前日、反則行為を止めない限り、明日の入浴は取り止めになる旨告げられた。
刑務所側も手間が省けるから反則にかこつけたのだ。彼は入浴をのがれるための口実を用意していたが、向うから入浴日を取り消してきた。昼でも、夜でも、ごつんごつんと、鉄具をぶつける音が舎房に響き、薄暗い通路にもその、彼の身を削るような音は洩れて出た。
「ああ、また、いつものやつだ」
と、馴らされた看守たちは思うようになった。痛さを代償に、白岩由吉は、わが身の自由を得るために、骨身を削った。
彼は、いつも自分をオホーツク海を埋めつくした流氷の氷塊の一つになぞらえた。
遠い海から運ばれて来た氷塊は見知らぬ地で、お互いに鎬（しのぎ）を削っている。お互いが、お互いを傷つけ合っているのだ。きいきいと悲鳴を上げ、ぎぎぎいっと相手の体を粉砕する。
負けた者は粉々に飛び散り、おのれの元のかたちを失くす。彼はただ、耐え続けた。敗者になってはならない。
相手を呑み、制して巨大な塊になって行く流氷の王者になる気構えを持った。
春になれば…氷塊は去る、その時に、このわが身も飛び立つ渡り鳥のように、雄々しく翼を広げて、この地獄の舎房からおさらばする。
そうだ、おれはちっぽけな氷塊だが、す

べての氷塊を、このおのれの力で叩き壊し、粉々にしてやる。そんな力強さがなければと、白岩由吉は自分に言い聞かせていた。

5

気のせいか手枷の鉄具の止め金部分が少し緩んできたような気がした。

相変らず、ごつんごつんと手首を板床にぶつけていた。それから味噌汁を毎日、かしめ部分にかけた。塩分のために錆び、鉄の穴がぼろぼろに腐蝕すると考えた。

看守がやはり用心のために覗き込むと、

「これで少しは楽になるべえ。肩のあたりまで痺れてしまうもんでえ」

と、言い訳をした。

なにしろ不自由な恰好を半年以上もさせられているのだから、背中も、足腰もみんな痛かった。

肩も凝ってきて時折りは頭痛にも悩まされた。彼は夜中でも、こつんこつんとやっていたが、やがてまた二週間目の入浴日がきた。反則だからと言ってずっと入浴させないわけにもいかない。

重労働に従事する者は入浴は一日おき、構内作業所で働らくものは週二回、そして、独居房内から外に出ることを許されないものは週一回のきまりがあった。

入浴日、小塚看守が顔を出した。

「おい、また大掛かりのことだ。いっそのことな、石川五右衛門のように釜ゆでの刑

にしろって声もあるぞ」
「担当さん、わだしもほんとは申し訳ないと思っています」
「おっ、そういう気持になることはこれは大切なことだぞ」
珍らしく小塚看守はことばを和らげた。久し振りに彼が口をきいたからだった。
「それで、実はお願えがあるで、きいでもらえねえ うでしょうか。どこが関節が膿んでいるらしくで風 呂にへえったあど、膝んところが腫れ上って、ずきずき痛むんです。しばらぐ、入浴は休ませでもらえねえでしようが」
「うむ、規則だからな。いま看守長に相談してからだ」
四角い大きな顔をした小塚看守が、彼の視野から消えた。
ほんとうは、週一度の入浴日だけを楽しみにして生きてきたようなものだった。
手は自由になるし、体中は暖まるし、この寒さの中で体調を維持するには入浴は欠かせない健康法の一つだった。
戦時中の刑務所のことで、この網走刑務所でも特警員制度が採用されていた。模範囚や刑期の短いものを特別に、看守の助手として使っていた。
網走刑務所ではこの時期、来たるべき決戦に備えて収容者の多くを構外作業に狩り出していた。
海軍航空隊の美幌（びほろ）飛行場、女満別（めまんべつ）、小清水の両飛行場、ま

た釧路の太平洋炭鉱、空知炭鉱、それに北からの敵の上陸に備えて、網走沿岸には寒さもものかは、トーチカの築造工事がすすめられていた。人手がいくらあっても足りない戦時下の状況であった。

入浴日に、七人も人がつくが、そのうち四人はこの特警を任命された受刑者仲間であった。過去の脱獄例のほとんどは、受刑者仲間の助けがあってのものが多かった。

みんな黙々と、止め金を外し、また止め金を打込む作業を手伝ったりしたが、四人の特警員が、彼に 加勢すれば、暴動騒ぎが起る可能性は充分にあった。

前々から入浴日の逃走の可能性について、刑務所側も検討し、また特別の警戒体制もとっていた。

ともかく、白岩由吉はこの刑務所のお荷物なのだった。結局、渡りに舟の気持もあってか、小塚看守が戻ってきて、

「病気なら仕方ないだろ。しばらく様子を見ようということになった」

と、告げた。

「いろいろ、注文ばつげで申しわげありません」

どこまでも下手に出た。

もちろんうわべだけのことで、彼は心の中では新たな反抗心を滾（たぎら）せた。

“絶対におめえの当直の夜におらは逃げてやるがらな”そう心に誓った。

これまでの何度かの脱獄の動機となっているのは、権勢をふりまわす看守の連中へ

の意趣返しが多かった。
彼に逃げられて、免職された者や、降格、減給処分に　された看守たちはたくさんいた。それに、彼には当面の敵が目の前にいなければならなかった。
“この男、いつか叩き殺してやる”
彼は小塚看守に憎しみの眼を向けていた。入所した時のトラブル以来の犬猿の仲である。だが今度は、憎しみの対象の他に、自分自身の生命についての危機を彼は強く感じていた。
脱獄を果さなければ手枷を嵌められたまま死ぬ、彼は極限の状況に追いやられていたのでもあった。吉峯老人への無言の約束事もある自分をふるい立たさせるために、彼は自分に使命を課し、毎日毎日の辛さに耐えたのであった。
入浴日は人手不足を理由に、取り止めになった。
「あんな野郎に大尽気分で釈前入浴と同じ気分を味　わわさせることはない」
看守間の強い反発心もあった。もっけの幸いとばかり、特別入浴はなくなった。
だが、もう四十にもなる小男は臭気にまみれた。垢まみれの獄衣に、糞便のこびりついた匂い、なるべく看守たちが近寄らないように、獄房の中に糞便をまき散らし、彼は壁にまで自分の糞便を塗りつけた。
それから、鉄具の止め金部分を腐蝕させるために味噌汁だけでなく小便を掛け、錆びつかせた。

鉄のボルトがぼろぼろになることを願った。沢庵に含まれた塩分を、唾液と共に、止め金の頭にくっつけたりもした。
彼は、槐材に止め金のかしめ部分をぶつける行為が無駄ではないことを知った。
ある日、頭の部分の広げられた平べったい止め金の一部が、ぽろりと取れた。
そこは薄く伸ばされ、小さな亀裂が入っている箇所だった。
もう錆びついて脆くもなっている。
鉄片と言っても飯粒ほどの小さなものであった。だが、欠けたその鉄片を見て、彼は確信を持った。
根気よく続ければ、一つずつ、鉄片が、鱗が剥がれるように落ちて行き、止め金としての力を失なって行くと思った。
用心はした。
四、六時中、ごつんごつんとやっていては破錠行為だと思われる。それで、看守の数が少ない時、忙しい時、夜間を見計って、破錠行為を続けた。
流氷群が特に牙を剥く夜などは、天祐のひとときであった。
ぐわしーんっ、ごおーんどどどーんっとね大砲を撃つような音も響いて来る。
彼は流氷群の怒りの声を借りて、ごつんごつんと、骨に響く、この、痛くて辛い行為を執鬼の一人になって続けていた。６
あの、黒ずんだ手首の傷の跡が完治していたわけではなかった。ヨードチンキをつけてもらい一時的によくなったが、

黒い輪の跡は皮膚が盛り上り、痒い感じがあった。
すっかり、白岩由吉は押し黙ってしまった。そのお陰で、刑務所側は、彼が逃げることを断念したと見ていた。
厳寒の季節をやっと切り抜けた。
三月も半ばになっていた。
だが、網走沖の流氷群は去ったわけではない。
しかし、彼は獄中にあつて、春の胎動を身近かなものに感じた。
地吹雪の地を揺るがす音と、氷塊の身を軌ませる音、生き物を寄せつけない厳しい自然界だったのに、時折り、名も知れぬ海鳥の声が聞えることがあった。
網走刑務所に来る時、汽車の窓から、沖合いの水平線に沿つて伸びている白い一本の線を見た。
流氷群が網走の浜辺から去り、オーツクの彼方に去ろうとしている時のことであった。
脱獄のことだけを考え続けて、すでに一年近くが経っていた。
やがて、海鳥たちが集まつてくるとオジロワシやオオワシなどが空に飛来して、羽を休めるために氷海の上に降り立った海鳥たちを襲う。
白い雪が血に染められる。生きものが生きものの活動を始める。
が、三月の末のある日、彼は目覚めてみて、愕然（がくぜん）とした。

手枷が嵌り込んでいる手首の黒い輪が、赤い血を滲ませていた。
皮膚が、かさぶたのようになり、皸（あかぎれ）のようなって、そこが破れていた。凍傷の傷ではなかつた。
鉄具を打ちつける苛酷な行為が、鉄具を壊す代りに、自分の手首の皮膚に傷口をつけてしまったのであった。
それでも、破錠行為は止めるわけにはいかない。少しずつ、たしかに緩んでいた。あと、しばらくの我慢だった。
彼は薬をつけてもらうことをためらった。鉄具が嵌められっ放しになっているための傷にはちがいなかった。
膿（うみ）も少し出ている。このまま放置すれば、化膿してくることだろう。しきりに彼は自分の唾液を傷口に塗りつけた。唾液には殺菌力があると聞き知っていたからだ。
ごつんごつんと槐材にぶつけると、余計に傷口は広がるように思えた。
たしかに、止め金部分は、ガタが来ていたが、すぐに外れる状態でもない。この傷口を発見されて、医務室にでも連れて行かれれば、苦心惨憺（くしんさんたん）してここまで、止め金部分を緩めた努力が水の泡になる。
戒具を外して治療することになるにちがいなかった。手が自由になっても今は逃げる自信がない。
春の便りが届いているとは言え、ど

こへ行ってもまだ雪野が広がっているだけだった。時期が悪い。
だが、ある日、とうとう、野沢看守に発見されてしまった。
「おい、その傷じゃどうもならんぞ。治療してもらったほうがいいんじゃないのか」と、声を掛けてきた。
もう、この日あることを覚悟していたから彼は言いのがれることばを用意していた。
「こしたもの腐って落ぢでも身がら出た錆だ。アんだぁんだ。こしたひでえ目に遇うのも、おらが看守のみなさんさ、迷惑かげてきたがらだんだびょん。それさ、担当さん、前にカニ工船さ乗ってだどぎ も、タコ部屋さいだどぎも、こした傷、赤チン塗っておいだきゃ治ってしまったはでな」
「そうか、様子を見ることにして、ヨードチンキでも塗ってやろうか」
薬を塗る時に、止め金部分を点検されはしないかと考えたが止むを得なかった。仔細に手にとり、止 め金部分を指で丹念に探らない限り大丈夫だと、彼は判断した。
これが、小塚看守なら、傷口を見る前に、止め金部分を点検したにちがいなかった。ヨードチンキの消毒剤を塗られる時、無理に彼は「いでえ、うーむ」と大袈裟に立ち騒いでみせた。
野沢看守の気持をほかのことに外らし

が、一時的に傷口はよくなったが、また、鉄枷を床板にぶつけ始めると、傷口が新たに広がった。

傷がもっと広がると、ほんとうにバイ菌が入ってもっと悪化するかも知れなかった。

汗を掻くので腋の下が不潔になり糜爛（びらん）状態にもなっていた。

膿が出たあとはかさぶた状になった。

破錠行為は傷が治るまで、一時的に止めざるを得なかった。

ただ、ひたすら、唾液を塗りつける。獄房内の桶製の便器は、自分で毎朝捨てに行くことはできないので、雑役夫が、看守立合いの上でその代りの役をつとめた。白岩由吉の手の傷のことをよく知っていた。

ある朝、食事の木盆と食器の下に、が五数枚入っていた。雪の下の葉雑役夫が、構外作業をしているだれかに頼んで手に入れたものにちがいなかった。

雪の下は傷口、とくにしもやけの薬としてよく知られている。葉を指で揉み、液汁を絞り出す。傷口につけた。

三日に一度、この雪の下の葉の差し入れは続いた。彼は、みんなが無言のうちにも彼を励ましてくれていることに勇気百倍した。

雪に埋まっているはずなのに、名前も顔も知らぬだれかが、何人かの手を経て薬草を届けてくれたのだった。

それでもある夜のこと、あまりに傷口がむず痒く、ちくちくと痛むので彼が眼を覚ますと、赤い傷口の 肉に数匹の蛆虫（うじむし）がもぐり込んでいた。
汚物が房内にはあるから、暖気と共に蝿が迷い込ん でいた。
傷口に卵を生みつけられたのだった。はじめは口先をとがらせ、息を吹きかけて、吹き飛ばしたが、なかにはしっかりと肉に食らいついているのもいた。
指先でつまみとるには手が不自由だった。肉を啄（ついば）ばまれると、ちくちくと傷口が痛んだ。
結局、口先で咥（くわ）えて取り除くのがいちばんいい方法だった。
「蛆虫野郎めがア！」
それは、こんなひどい目に遇わせている連中に対する怒りのことばであった。彼は一匹ずつ、口の中に咥えとり、歯と歯の間で、蛆虫を潰した。
川合所長に、保安課長、小塚看守……彼が敵視している看守たちは他にもたくさんいた。彼らの顔を思い浮かべ、一人一人名を呼びながら、彼は蛆虫共を一匹ずつ殺して行った。
噛み潰し、呑み込む。敵を肚の中におさめた。薬草の効果はあったようだった。緑の液汁には青臭い匂いがあった。
彼の傷口はやがて塞がった。
だが、柘榴（ざくろ）のようにぱっくりと開いていた傷口だから、手首には、

はっきりと傷跡が残った。
仲間に助けられて、傷は完治した。
同時に、流氷の去る季節がやって来た。「南風（だし）がもうそろそろ吹く頃だな」と看守が喋っているのを聞いた。
南からの強風が、暖気を運んで来ると、さしもの大氷塊も解け始める。
大きいものでは十メートルほどの高さの巨大な氷塊もある。彼には氷塊の下の青い海の色が見えるような気がした。
海鳥や子アザラシがオジロワシなどに狙われる。そんな凄絶な死闘の声を聞いたこともある。
宗谷岬から能取（のとろ）岬、そして納沙布（のさっぷ）岬とオホーツク海に面したあたりはただぎっしりと大氷原の白い山々に占領されていたのに、少しずつ氷の面が緩み始めた。
この頃、白岩由吉は、あとは時期を待つだけだという思いになっていた。
髪はぼうぼうに伸び、髭も剃らないので、乞食が一人、獄舎で飼われているようなものだった。
なにより、三ヵ月は風呂に入ってはいないのだから、強烈な汚臭がした。あまりに臭いものだから小塚看守などは顔を出す機会が少なくなった。
完全無欠の頑丈な鉄具を造り出したことに川合所長や、保安課長などは大いに満足していた。
秋田刑務所の鎮静房を破られたために

、その後、秋田刑務所の所長は格下げになり、未決囚だけを収監する拘置所の責任者にと配置転換させられていた。
「やはり、完全主義を貫ぬかぬからだ」と川合所長はダルマストーブの火に当りながら部下に語ったりした。
が、白岩由吉は彼らをみんな敵に回し、着々と、脱獄準備をすすめていた。

（第五章　了）